

震災臨時号



2011.5月



発行 城里町社会福祉協議会 ☎ 029-288-7013 FAX 029-288-7021 ホームページ <http://www.shirosato-syakyoo.com>
編集 広報ボランティアグループ

混乱のなかで



給水を待つ人（コミセン前）



マンホールが浮いた



給水車



倒壊した家屋

あいさつ

社会福祉法人

城里町社会福祉協議会

会長 阿久津 藤男

東日本大震災により、被害を受けられた町民の皆様
に心からお見舞いを申し上げます。このたびの大震災により、多くの方が避難所生活を強いられました。避難所生活が長引く中、避難をしている方々に、夜間の介護や避難所の清掃、炊き出し、またマッサージやひげそり、清拭等のボランティアをしていただいた方々があります。震災の混乱の中にあっても、思いやる心をもったボランティアの方々から感謝と御礼を申し上げます。

当会では、今後も更に「人と地域を結びつける」活動を強化し、町民の皆様と共に、誰もが安心して暮らせる地域をつくりあげていきたいと考えております。

（地震発生時の桂地区）

消防団と町職員の連携が

高齢者の安心につながった

その時町民は...

3月11日（金）14時46分、震度6弱の地震に、多くの人々は我を失いました。家から飛び出し庭の木にしがみついた人、テレビを押さえておろした人、畑でしゃがみこんだ人など、初めての経験に、皆戸惑いました。その後、断続的に襲ってくる余震に、多くの人々がその夜を車のなかで過ごしたり、洋服のまま床に就いたりしたといえます。

その時桂支所では...

地震発生時、職員8名、皆無事に駐車場に飛び出しました。暫くして桂地区消防支団長の森田主税さん（上坪）、副支団長の折笠文雄さん（錫高野）、船橋渉一さん（下阿野沢）、富森一郎さん（阿波山）が駆けつけ、桂支所職員と取るべ

き行動について話し合い、すぐに実行に移されました。第一に被害状況を把握

すること、停電に伴い使用不能になる水道水を確保することなどです。その日のうちに家屋の状況、石堀の崩落や道路の亀裂・陥没の実態が把握され、水は給水車に2千リットル蓄えられました。

次に、災害時の避難場所となつた岩船小学校、小松小学校、石塚小学校等の明かりを確保することでした。電話も携帯も通じない

中、その頃には桂地区消防団の分団長がほぼ全員支所に顔を出していました。まず、各分団に常備されている発電機と投光機を支所に集めようということになり、集められたそれらの機器が各避難所に持ち込まれました。あたりが暗くなり

始めたころ、森田消防支団長から一人暮らしの高齢者の方々に食事を届けよう、という提案がなされ、職員が「やりましょう」と応じ、直ちに米、ガスボンベ、釜、

翌朝、5升、4升、3升炊きの釜で、計1斗2升の米を炊きあげ、女性職員3名が約400個のおにぎりを作りました。少しでも安心につなぐればと、大きめに作ったそうです。13日と14日には同じ量のおにぎりに味噌汁が加わりました。それ

ら高齢者に届けたのは12日、13日が消防団員、14日が民生委員や議員の方々でした。また、14日には阿波山の5名の女性の方が食事作りを手伝いました。12日の朝早く、桂全域で消防団員が「大丈夫でしたか？」と声をかけながら各

家庭を訪問しました。一人暮らしの人たちは、その時の「声かけ」が一番心強かった、と後日語っています。また、一人暮らしの関沢

光子さん（下坪）は、地震直後に近所の人々が、無事を確かめに来てくれたこと、配られたおにぎりや味噌汁の味は一生忘れられないと涙ぐみます。

次の日、近所の君島マリ子さん、鈴木俊子さんが関沢さんを訪れた時、「食事作りが不自由な人に食事を作って届けよう」という話になり、早速釜と米を持ち寄り、おにぎりを作って、近所の高齢者や独り暮らしの男性などに配ったそうです。それには、町から届いた「おにぎり」のお返しの気持ちがあった、といいます。

いたる所で住民同士の助け合いが生まれた

停電に伴い水道が使えなくなりしました。水が無いことは一番の不安です。給水車には長い列ができました。



君島さん 鈴木さん 関沢さん

しかし、自宅に井戸を持つ人々が「水を自由に使って下さい（煮沸すれば飲めますから）」と近所に呼びかけたことから、人々に安心感が生まれました。また、湧水を汲み、近所の高齢者にくばった人、食事作りが不便な人たちのために自主的に食事を作った人たちも町のあちらこちらにいました。このように、人々の気遣いや助け合いが町の至る所で生まれました。別の言葉で言えば、それまで眠っていた町民の絆が地震を契機として力強く表に出てきたとも言えそうです。

私たちにできること

城里町民生委員児童委員協議会
会長 園部 良夫

3月11日(金)に発生しました東日本大震災から一ヶ月以上たちました。東日本大震災による被害にあらわれた皆様に、謹んでお見舞いを申し上げます。なくなられた方、行方不明者をあわせて、27,000人にもものぼり、まだ現在まで正確な人数が分かりません。今後まだ増えると思います。被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。民生委員として何かお手伝いが出来ないものかと考え、役員の方と相談した結果、保健福祉センターにもたくさんの方が避難されていると聞き、保健福祉センター内のお手伝いをすることになりました。3月19日から3月25日までの1週間、午前と午後に分かれ、主に男性は、トイレの掃除とおしぼりの洗濯、女性、みそ汁作りと麦茶作りを担当しました。一日6

名で参加し、50名の民生委員全員が積極的に活動し、1週間にわたり、手伝いも無事終了することができました。また、この時は、ガソリンが不足し、どこのスタンドに行ってもガソリンを入れることが出来ない異常な状態でした。歩いて来る方、自転車でも来る方もいました。更に一人暮らしのお年寄りを対象に飲料水や生活物資を届け、感謝のこたばをかけていただきました。余震が続いております。

最後に、行方不明になっている母親に、こんにちは(4歳)が、覚えてばかりのひらがなで、手紙を書きました。「ままへ、いききているといいね、おげんきですか」今もまなみちゃん、海岸を見つめ、母親と妹を待っています。悲しいことです。涙がとまりません。「わたしたちができること」地域のつながりと、一人ひとりの協力がいかに大切かを痛切に感じました。

大活躍の「ガッチャンポンプ」

3月11日(金)午後2時46分、東日本をマグニチュード9という未曾有の大地震が襲いました。その後停電と断水に見舞われ、今までに経験したことのない耐乏生活が始まったのです。

電気の通じない不便さ、物が思うように手に入らないもどかしさ、電話も通じないイライラ感とそれはもうストレスが溜まるいつもの生活の始まりでした。なかでも「水」の存在は我々が生活していくためには無くてはならない大きなものです。

ノドの乾きを満たすことは勿論のこと、ご飯を炊くにも洗濯するにも水を確保しないとどうしようかと思つた時、とっさにひらめいたのが共同墓地入口にある手漕ぎポンプ通称「ガッチャンポンプ」の存在でした。実は災害が発生する10日程前まではパッキンが壊れ

ていて使用出来なかつたものの。春の彼岸がまもなくなので修理しておこう、ということだったようです。

さらに修理が終わった後、お墓の掃除に来た人達がポンプで水を汲みながら「これがあると災害時に役立つね」「でもこの辺りは災害が少ないし万が一、このポンプが活躍するようなことになったらそれこそ大変だよ」などと話していたとのこと。ともあれ災害の翌日からこのポンプの大活躍が始まったのです。ポンプの存在を知っている人達は皆、朝、目を覚ますとすぐにバケツとペットボトル、



阿波山共同墓地のガッチャンポンプ

やかんを軽トラなどに積み込んでポンプのある墓地へ列をつくってポンプより水を汲んでいました。

順番を待ちながら誰彼となく今度の地震や津波の被害そして自宅の被害の状況、さらにはこの災害を経験して身につけたちょっとした工夫など、普段お互いあまり話をしたことのない人達が輪をつくって語り合っていました。

また若い男性は自分の分を汲み終えても年配者の分までポンプを漕いであげたり、子供達もペットボトルなどを運んだり、ポンプの周りはさながら昔の良き時代にタイムスリップしたような雰囲気を感じました。

このポンプは我々のノドの渴きを癒してくれただけではなく、人と人とのつながりや助け合いの心をも改めて作り出してくれました。そして災害後、水道が復旧するまでずっと水を供給してくれたのは勿論のことでした。

ティア活動～

いただきました。参加していただいた方

●富永 一さん (石塚)

作業現場に向かう途中、周りを見渡すと、崩れ落ちた石塀、落ちた屋根瓦、道路の陥没が至る所で見られました。私は、崩れた石塀や瓦の片づけ等を行いました。が、あらためて大地震のごさを思い知らされました。

●栗原 崇郎さん(上入野)

少しでもお役に立てればと、瓦礫の搬出、搬入作業に参加し、感謝と労いの言葉をかけられ意義ある活動だったと思います。膨大な瓦礫の現状を見て、これから復興の本番であるし、何をどうすればいいのか考えていきたいと痛感しました。

●細谷 洋子さん(上青山)

城里町でも多大な被害を受けた東日本大震災、まだ余震の続く中、落ちた屋根瓦の撤去作業に参加しました。破片の量の多さに驚きながら袋に詰め、運び出すにも力のいる作業でした。皆で協力し合うということの大切さを改めて感じました。

●加藤木 正道さん(孫根)

災害ボランティアに参加して、この度の大地震により、この町でも大きな被害を受けました。町シルバー人材センターよりボランティアの依頼があり、私達4人の仲間に参加しました。一人住まいの老人宅の屋根瓦の片づけ運搬です。きれいに片付いた庭を見ながら、人の役に立つ喜びを感じました。



●加藤木 力さん(孫根)

3月11日(金) 東日本大震災で城里町でも大きな被害がありました。町シルバー人材センターからの依頼で、ボランティア活動に参加させて頂き、仲間たちと落下した瓦、石塀の運搬を行いました。余

震の中で、大変な作業でしたが、当家の方々に感謝の言葉を頂きました。復旧、復興には時間が要しますが、一日も早くできることを願っています。

●小坪 近知さん(那珂西)

3月11日(金) 午後、地震発生、強い揺れである。上下、左右。家は、妻は、そして息子夫婦と孫たちは：出先である。

「苦労様です」心からの感謝の言葉に、微力ながら、早く心休む日が来る事を願うばかりである。思いやりで助け合う、協力の輪を広げる、人的支援活動で地域の困難を分かち合い担う。

現場に直接足を運ぶボランティア活動、他人事でない。なぜなら少なからず震災の被害者であるから。この震災で多くの人が感じて



「ありがとうございます、ご

移動の途中でも震災による瓦の落下、塀の倒壊、壁の剥離。自然の猛威、恐怖であり無力感を覚える。

～災害 ボラン

震災時に多くの方にボランティアをして
(一部)の声を掲載いたします。

いること、一人一人に語りかけ問いただし：自分のため、家族のために頑張る。一方で自然災害に苛立ちを覚えるのも事実である。

●寺門 茂雄さん (石塚)
瓦は重い。落下した瓦の撤去を一人暮らしの住宅で9名の参加で行った。一面に広がる状態を見て半日はかかると思ったが、学生さんとご婦人達のがんばりであっという間に終了。肥料袋の強度にはビックリ。もしもの事を考え、袋は大事に保存しときましょう。

●山倉 秀樹さん (石塚)
今回の大震災により、私達運転ボランティアは他の

グループの人達と、被害を受けた高齢者宅の屋根から、家の周囲に落下した瓦を集める作業を行うことにした。屋根から落下した瓦は多くの破片となって散乱していたのには驚いた。だが、参加者と分担し、集積作業、搬出を終了した。

●鯉淵 茂生さん (下坪)
私の方こそ感謝です。ほんのちよつと、ボランティアで、大谷石を片付けたただけです。当家から、感謝の言葉を聞くにつけ(久しく聞いていなかった)、嬉しくなっていました。この私が人の役に立つなんて。有難い。有難うございました。

●細谷 純子さん(上青山)
災害ボランティアとして落下した瓦の撤去作業に参加しましたが、途中からの参加でしたが、共に作業をした学生さん達の若い力は頼もしく感じました。周りの家々では、ほとんど片付け

られていた時期だったもので、依頼者様には少しでも安心して頂ければ嬉しく思います。

●桑野 敬子さん(上青山)
余震が続く中での軒下の瓦撤去、車で収集場所への搬送は思ったより大変な作業でしたが、学生さん達は一生懸命取り組んで、その姿に胸が熱くなりました。マグニチュード9の大地震は大きな傷跡を残しましたが、人とのつながりの輪を大切にしながら、これからの生活にいかしていきたいです。



●寺門 拓さん (石塚)

「地域のボランティアをしてくれませんか」と社協からの連絡。内容は地震で落ちてしまった屋根瓦の撤去作業。自転車で向かう途中、青いシートで屋根を覆っているたくさんのお家を見て、改めて被害の大きさを実感した。瓦を袋に入れ、片付ける作業だったが、お年寄りには大変なことだと感じた。手際の良いボランティアの方々を教えていただきながらの作業だったが、少しでも役に立てたのならうれしく思う。また、今後もできる事があれば行っていきたい。

●廣木 咲貴さん(阿波山)
今回行った瓦を拾い集めるボランティアは、少し暑い中、服が汚れながらも重い瓦を運び出す大変な作業でしたが、周りのみなさんと協力して無事に手早く作業を終えることができました。震災の中で、このような貴重な体験ができたこと

を誇りに思います。

●廣木 将さん(阿波山)
震災後に一人暮らしのお宅の瓦や瓦礫の撤去作業のお手伝いをさせていただきました。本音を言うとボランティアなんてガラじゃないし、面倒だなと思っていました。でも参加してみても自分にも出来ることがあるとわかり、何より依頼された方に大変喜んでもらったのが嬉しかったです。震災後まだまだ復興できない地域があると聞いています。機会があればもう一度、現地に向いてお役に立ちたいと思いました。



地域の力

震災を乗り越えての施設開放

山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）

山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）



山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）

山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）

山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）



お風呂

山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）

山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）

山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）

山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）



※ホロルの湯は3月23日より営業しました。

しろさと しまだれ桜



山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）

山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）

山ゆり荘は、施設の壁やボイラー、風呂場のタイル等に、地震による損壊は見られたものの燃料の確保、安全の確認がとれたので3月18日（金）より町内の人達に無料で風呂場を開放しました。（4月1日からは通常料金で通常営業）

―初めての体験―

震災直後の慣れない生活をふり返って

避難所に避難された方のお話を紹介します

避難所に一夜を明かして

田所 厚子

3月11日(金) 予想もしなかった「東日本大震災」がありました。地震があった2時46分頃は外出して、耐震性の建物に居てこれほどの大きな地震だとは思いませんでした。

夕方帰宅して家の状態に呆然としました。庭には瓦が散乱し、家の中は足の踏み場の無いほど物が散乱していました。預金通帳や印鑑などの貴重品、医者や薬などをリュックに入れて役場へ行きました。

避難所を紹介してくれたのですが、場所が曖昧で行く所が定まりませんでした。暫くして石塚小学校へ車で送って下さいました。

小学校ほどの教室も避難して来た人で、一杯で横になるスペースが無いほどです。周りに人が居て、話し

声が聞こえるだけで心が落ち着きました。しかし絶えず余震があり、地震に対する情報が何も無かった事が気掛かりでした。部屋は懐中電灯とろうそくが灯してあり、石油ストーブが1個ありました。1枚の毛布を夫と足に掛けていましたがとても冷えました。

飲み物やお菓子が差し入れられ、しばらくして小学校に炊き出しのおにぎりが届けられ、1個ずつ配られました。その暖かさにうれしくなり、サーチライトで廊下を照らし、トイレを流すのにバケツに水を汲んでくれました。

親身にお世話をして下さった役場の方、社協の方、ありがとうございました。



8日間の避難所生活

三村 美代子

3月11日(金)、東日本

大震災を受けて、生まれて初めての恐ろしい場面に出会いました。塀が壊れ、瓦が落ち、家の中の物が散乱し、地獄を見ているような思いでした。夜はまだ寒い時だったので主人と車の中に身を寄せ、何回もくり返される余震に怯えながら、

眠れぬ一夜を過ごしました。翌朝近所の人達が次々と来てくれ励まして下さいました。

そして社会福祉協議会の事務局長さんから「避難しませんか」との声がかかり、どんなに心強く感じたことか。12日の夜から常北保健福祉センターにお世話になりました。保健センターには、大勢の人が集まっており、職員さん達は対応に追われていました。一人一人に優しく声をかけ、にこやかに応対している姿に私は感動しました。

電気がつかない、水が出ない、品物を買えない、ガソリンがない、こんな事が今までにあつたでしょう。14日の夕方電気がついた時、避難所の人達の嬉しそうなお顔を今でも思い出します。職員さん達も家に帰れば同じ様に変な顔に顔にも出さず私達に接してくれている姿を見てありがた

さで胸がいっぱいになりました。今度ほど毎日あたり前に暮らしていける生活がありがたいと感じたことはなかったです。まだ安心は出来ないけれど、命があっただけでも喜ばなければならぬと思います。

沢山の人達に見守られた8日間の避難所生活は、私にとって忘れる事の出来ない思い出になりました。これからまだ原発の問題や大きな余震がありそうな情報を聞けば、不安は限りなくあるけれど、元気を出して頑張って生きたいと思っています。

避難所でお世話になった方々本当にありがとうございました。



緊急時の対応 Ⅱ まだ続く余震 Ⅱ

地震発生時の各自の行動

〔地震発生〕

- ★落ち着け！
- 大きな揺れは数十秒。揺れが収まってから素早く行動。
- ★火を消せ！
- ★身の安全を守れ！

机、テーブル等の下に身を寄せる。座布団等で頭を保護。

- ★玄関（戸）を開ける！
- ドアを開け避難路を確保。

〔揺れが収まったら〕

- ★火元を確認
- ガス栓をしめる。電気ブレーカーを切る。
- ★家族の無事を確認
- ★非常持ち出し品の確認
- ★靴を履く

- ★近くに火が出ていないか確認
- ★余震に注意

〔正しい情報を収集〕

- ★ラジオをつける
- ★デマに惑わされるな
- ★電話はなるべく使わない

〔避難・救出・救助活動〕

- ★車で逃げない
- ★ブロック塀、ガラス、瓦礫に注意
- ★行き先メモを玄関に
- ★子供を学校へ迎えに
- ★避難路に注意
- ★みんなで消火活動、みんな救出活動

〔その他〕

- ★寝ている時
- ふとんにもぐる。ベッドの下に入る。
- ★入浴している時
- ドアを開け避難路の確保。
- 浴槽のフタをかぶり、頭を保護。

〔水〕

- 井戸水、湧水はどこにあるか等、水源の情報を知っておく。
- 雨水をためておく。
- 浴槽の水をはっておく。
- （幼子がいる家庭は注意）

〔電気〕

- 懐中電灯（LEDライトがよい。）
- ラジオ（携帯用）
- 電池（種類を揃えておく）
- ソーラー電気（外灯）

〔ガス〕

- 多くがプロパンガスの為、各自で復旧できる。
- 卓上ガスコンロ等があると便利。ガスボンベの確認。

〔灯油〕

- 石油ストーブがあれば暖をとれる。

〔家具〕

- 耐震装置をつけておく。
- 以上参考にして下さい。

我が家の非常持出袋

（いつでも持ち出せる場所に備えておく）

- 現金・預金通帳・ラジ
- オ・電池・懐中電灯・非常食・水（ペットボトル）・非常用給水袋・救急セット（常備薬）・ライター・防寒着・換え下着・靴下・手袋（軍手）・毛布・ヘルメット・防火ずきん・ビニールシート・メモ用紙・筆記用具など。
- ※年に一度は点検を！

平成22年度赤い羽根共同募金運動実績報告

ご協力ありがとうございました

22年度におきましても、町民の皆様や法人（企業）学校・団体等のご協力をいただきまして、誠にありがとうございました。

お預り致しました赤い羽根共同募金は、23年度において実施する地域福祉推進のための事業、ボランティア活動支援、福祉教育推進などに活用いたします。

歳末たすけあい募金は、支援を必要とする、ひとり暮らし世帯などに配分いたしました。

赤い羽根募金

募金種別	募金寄附者	金額
戸別募金	445自治会	3,358,300円
法人募金	139団体・企業	1,013,000円
職域募金	18課・局	28,972円
学校募金	23校・園等	385,537円
その他	個人・団体等	15,318円
合計		4,801,127円

歳末募金

募金種別	募金寄附者	金額
戸別募金	444自治会	2,219,600円
その他	個人・団体等	97,292円
合計		2,316,892円

目次

- 混乱のなかで..... 1
- 消防団と町職員の連携が高齢者の安心につながった..... 2
- 私たちにできること..... 3
- 大活躍の、ガッツチャンポン..... 4
- 災害ボランティア活動..... 5
- 地域のか..... 6
- 震災を乗り越えての施設開放..... 6
- しるさと⑧「しだれ桜」..... 7
- 初めての体験..... 7
- 震災直後の慣れない生活をふり返って..... 8
- 緊急時の対応..... 8
- いざという時に慌てないために..... 8
- 平成22年度赤い羽根共同募金運動実績報告..... 8
- 目次..... 8
- 編集後記..... 8

編集後記

東日本大震災は、この城里町にも大きな爪痕を残しました。改めて自然の力、恐ろしさを痛感させられました。でもここにきて余震の続く中、皆やっとな落ち着きを取り戻し、復興に向けて動き始めました。

崩れた石塀や屋根瓦の補修、そして田畑の作業に多くの人達が汗を流している姿をみるとなぜかほっとした気持ちになるのは私だけでしょうか？

（わ）